

# 研究紀要

〔 5 3 〕

令和 3 年 3 月

大阪府立中央聴覚支援学校

## 目次

1. 校内研究会報告 … サポート部
2. 幼児が主体的・対話的な遊びを通して育つ保育をめざして … 幼稚園部
3. 主体的・対話的で深い学びの実現～小学部での取り組み～ … 小学部
4. 教科で取り組む、主体的・対話的で深い学びについて … 中学部  
～指導要録改訂で、より主体的な国語科の取り組みの実践報告～
5. アクティブラーニングを取り入れた授業の実践と今後の課題 … 高等部  
～近畿聾教育研究会（高等部研）をとおして～【数学科】 前田優香
6. アクティブラーニングを取り入れた授業の実践と今後の課題 … 高等部  
～近畿聾教育研究会（高等部研）をとおして～【英語科】 前堀薫
7. アクティブラーニングを取り入れた授業の実践と今後の課題 … 高等部  
～近畿聾教育研究会（高等部研）をとおして～【美術・工芸科】 藤戸朝子
8. 「こころとからだを育てる実践～自ら学び、互いに学ぶ生活づくり～」を研修テーマとして取り組んで … 寄宿舎
9. <第53回全日本聾教育研究大会（埼玉大会）>

※本紀要の用字・用語につきましては、「教育要領」「学習指導要領」を基本とし、大阪府やろう教育特有の表記を織り交ぜたものとなっており、報告により異なっていることがあります。

サポート部

研究テーマ 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けての取り組み」

## 1. テーマ設定の理由

2018年度、2019年度の2年間で「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」を研究テーマに据え、「主体的・対話的で深い学び」について基礎的なことを学んできた。その上で、幼稚部は保育、小学部・中学部・高等部は授業、寄宿舎は生活指導において子どもたちの発達段階や特性に即した研究を2年間行った。本研究テーマについて一般校での教育実践は多々あるが、学習スタイルに多様性があり幅広い教育的ニーズが存在する聴覚支援学校に焦点をしばった研究は発展途上の段階にある。そこで今年度も「主体的・対話的で深い学びの取り組みと実践」を研究テーマに据え、聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学びの取り組みと実践を蓄積し、今後の発展へとつなげる。また、本校は2020年9月13日に創立120周年を迎えた。創立された経緯や、今日までの教育、大きな功績を残された人物など、その長く深い歴史について振り返る中で、聾学校の良さや課題を考え、これからのろう教育に大切なものについて共通理解を深めていきたい。

## 2. 校内研究会 報告

(1) 日時 令和3年1月27日(水) 16:00～17:00

(2) 講師 堀谷 留美 首席

(3) テーマ 120年の歴史を振り返って～昭和・平成の戦略そして令和へ～

### (4) 要約

昭和後期から平成にかけての本校の歴史について講演を行った。本校は昭和初期に手話法も口話法も取り入れた適性教育「ORA（オーアールエー）」という、個々の実態に合わせた教育を行っていた。その中で高橋潔校長が手話を守り、大曾根源助校長が指文字を作ったことが有名である。しかし昭和後期になるとORA適性教育は衰退していき、幼稚部・小学部で手話は禁止し、指文字だけを使用していた。手話は中学部・高等部になってから補助的に使用するようになった。さらに、小学部1年生や2年生の授業では発音の指導などに多くの時間がかけられていたため、教科指導に遅れが生じることもあった。

その後、教科指導を一般校に準じて行うようになり、進路先が広がった。また、「きめ細かな指導が受けられる」、「集団に埋もれないで自分を出せる」など、進路選択において、保護者のろう学校に対する見方が変わっていった。

令和の課題として、補聴器の進歩や人工内耳の普及に伴う今後のろう学校の在り方や新しい生活様式への対応が挙げられる。そして、全学部の共通理解として「めざすべき全体像」を作ることが大切であるとともに、歴史を一人ひとりが作っていくという認識を持つことを全教職員で共有した。

## 1 はじめに

幼児期における教育は、生涯にわたる人間形成の基礎を培う重要なものである。このために教員が取り組むべきことについて、幼稚園教育要領には次のように示されている。「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。」

幼児の学びをより深めるためには、主体的に遊ぶ力をはぐくむ保育についての観点を見直すことと、保育の評価について方法を検討し、改善していくことが課題としてあげられる。昨年度の研究「主体的・対話的で深い学びの実現に向けての取組み」で得たことを実践するだけでなく、保育の評価方法を見直すことをめざした。

上記を達成するために、大阪府教育センターに依頼し、パッケージ研修支援をもとに研究を進めた。パッケージ研修は、これからの社会を生き抜く力の育成をめざして授業改善を図る取組みとして行われているものであるため、今回は、「主体的・対話的で深い学び」の実現とその学びにより身に付いた評価の方法について、支援を受ける形で活用した。

## 2 研究の目的

二つの目的をもって研究に取り組んだ。まず、幼児教育における、主体的・対話的で深い学びとは何かを追求する。そして、それらの学びにつなげるために必要な、環境構成や援助とはどのようなものかを具体的に考える機会をつくる。どの研究内容においてもこれらの目的を軸にする。

## 3 研究内容

幼稚園部全体で、大きく3つの取組みを行った。

### (1) 研修会

幼児期において育みたい資質・能力について共通理解を図った。

#### ア 教育センターの方からの講義

主体的・対話的で深い学びを実践するために、どのような視点をもつべきなのか、それを幼児教育に活かしていく考え方を、講義で学んだ。

- ・幼稚園において育みたい資質・能力は、①知識及び技能の基礎、②思考力・判断力・表現力等の基礎、③学びに向かう力・人間性等である。
- ・主体的・対話的で深い学びにつなげるためには、保育者自身はその保育を通して幼児たちにどのような姿になってほしいかをイメージすることが重要である。
- ・評価は、幼児の能力などを数値で測るためではなく、保育の改善に向けた取組みのために行うものである。

#### イ グループワーク

研究保育者が保育のねらいと内容、幼児に期待する主体的・対話的な動きを提示したあと、そのような動きを促すための支援や配慮の方法について話し合った。グループ分けは、幼児の実態を理解したうえで教員の配慮事項を検討できるように、同学年の担任同士で組んだ。話し合いを通して、支援や配慮の方法を具体的に考えることができた。下記はその一部である。

- ・動物の特徴を捉え、できるだけ細かい部分を一人ひとりが作ることを促す。写真をよく観察したり、友だちの意見に耳を傾けたりできるように言葉掛けをする。
- ・大きな絵を描くことを楽しみ、さらに友だちが見守りやすいように、画用紙ではなくホワイトボードを使うように変更する。
- ・まとめの部分では、実際に作ったもののほかに、ICT 機器も使用し、視覚的に保育の振り返りができるようにする。

## (2) 研究保育

学年ごとに研究保育を1回ずつ計画した。それぞれの保育内容を製作活動に統一することで、学年ごとの実態や活動の違いを感じられるようにした。

### ア 指導案の作成

幼児の実態に加え、ねらいを達成できるように教員が行う配慮事項について、できるだけ具体的に記載するスペースを設けた指導案を作成した。さらに、環境構成と援助について、主体的な活動を促すものには★、対話的な活動を促すものには●印をつけ、指導案上でわかりやすくなるよう工夫した。指導案を学年で検討したり、幼稚部職員に配布したりすることで、当保育についての共通理解を図ることができた。

### イ 事前保育

教育センターの方に保育を参観していただき、環境構成や指導案の書き方の改善に向けて教員全員で話し合った。「幼児が選べるように教材を並べて置く」などの配慮事項についても、指導案に具体的に書くなどの改善点が見つかった。

### ウ 研究保育の実施

事前保育で得た改善点を意識して研究保育を行った。それぞれの項目において、学年ごとの違いが分かりやすいよう、保育指導案から抜粋して記す。

	3歳児	4歳児	5歳児
活動名	『あきのたべものをつくろう』	『どうぶつをつくらう』	『みんなで大きな絵を描こう』
幼児の実態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日の取り組みや活動の一つひとつが、新鮮な経験となっている。</li> <li>・糊やはさみなどの道具の扱いに慣れておらず、個</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日々の遊びの中で、作りたいものがあると、幼児自身で素材を選んで作る。</li> <li>・友だちのアイデアを見た</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めての活動にも、友だちと一緒にであれば意欲的に参加する。</li> <li>・教員が代弁するときもあるが、自分の思いを伝え</li> </ul>

	別の支援を要する。	り、いろいろな作り方を知ったりして、自分なりに作ってみることで達成感を味わい、作ることの楽しさを感じる経験が必要である。	ようとする。
保育のねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・季節を感じながら、表現する喜びを味わう。 (思考力・判断力・表現力等の基礎)</li> <li>・「きる」「はる」「かく」の基本的な作業の経験を重ねる。 (知識及び技能の基礎)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動物に興味をもち特徴などを知る。 (知識及び技能の基礎)</li> <li>・自分なりのイメージを形にして作ることを楽しむ。 (思考力・判断力・表現力等の基礎)</li> <li>・友だちと一緒に工夫して作ることを楽しむ。 (学びに向かう力、人間性等)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージしたことをのびのびと描く。 (思考力・判断力・表現力等の基礎)</li> <li>・友だちと思ったことを伝えあいながら、絵を完成させる。 (知識及び技能の基礎)</li> </ul>
保育内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児の関心の高い「食」にまつわるテーマを設定。</li> <li>・全5時間で6種類の食べ物をあつかい、繰り返すことで見通しをもって取り組む。</li> <li>・「きる」「はる」「かく」などの基本的な作業で完成させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋の遠足で動物園に行き、興味をもったことからテーマを設定。</li> <li>・お互いの思いを伝えあいながら、友だちと一緒に動物を作る。</li> <li>・動物の特徴を製作で表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遠足で間近に見た動物の絵を、友だちと相談しながら描くことをテーマに設定。</li> <li>・友だちと相談したことをもとに、一枚の大きな紙に動物のパーツを一人ずつ順番に描き足していく。</li> </ul>
環境構成と援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>★切る作業が難しい幼児には、自分で新聞紙を破れるよう、幼児によってはあらかじめ切り込みを入れておく。</li> <li>●一人ひとりの作品を鑑賞し、よさを評価する。 (例)「パスで塗ること、頑張っていたね」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★写真や本などで特徴について知れるよう準備しておく。</li> <li>★どんな形にするのか考えるよう促す。</li> <li>●工夫している点があれば、そこに注目できるように他の幼児にも知らせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★描いた絵と写真を見比べて、気がついたことを発表する場面をつくる。</li> <li>●足りないところ、工夫するところを考えてみるように言葉掛けをする。</li> </ul>

### (3) まとめ

保育の内容や指導案の書き方について検討し、幼児にとってより学びが深まるように、保育の評価を行った。評価方法を視覚的に捉えるために「アドバイスシート」を活用し、教員一人ひとりが保育を見直せるようにした。

#### ア 研究協議会

研究保育を通して感じたことや改善できるところなどを、教育センターの方と幼稚部全員で協議し、自分だったらどうするか、保育場面を取り上げて考えた。製作のイメージをもちにくい幼児に対する具体的な配慮方法の一例や、ねらいを達成するにはもう少し経験を重ねる必要があったのではないかなどの、教育センターの方からの助言もあり、主体的で対話的な活動を深い学びにつなげるための、いくつかの方法に気づくことができた。

指導案には、幼児の主体的・対話的な動きを引き出すために、教員が計画的に働き掛ける事柄を具体的に書くことで、より丁寧な配慮をした保育を計画できると確認できた。また、「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力の基礎」「学びに向かう力・人間性」の3つの要素をねらいに取り入れることで、保育の観点がぶれにくいと感じたため、これからの指導案作成の際に意識していきたい。

「アドバイスシート」は従来、記入後に研究保育を担当した教員に手渡し、アドバイスをする形で使用してきたが、教員一人ひとりが考えを書き、手元に残すことができるような工夫をしていきたいと考える。

#### イ アンケート

すべての研究を通して、主体的・対話的で深い学びとはそれぞれどのような活動をさすのか、教員一人ひとりが記入した。アンケート結果から、それぞれの活動についてまとめる。

主体的な活動とは、幼児が自ら参加しようとする活動だという意見がほとんどだった。その中でも幼児自身が考えて行動し、意欲的に活動に参加するよう促すためには、教員の働き掛けやそのタイミング、環境設定が大切である。

対話的な活動とは、発表や、教員や友だちとの会話、音声言語や手話の模倣などことばに関するものだけでなく、視線や頷きなども、手話や音声言語がまだ十分身につけていない幼児にとっては重要であり、これに含まれるという意見が複数あった。幼児に対話的な活動を促すだけでなく、幼児からの発信に気づき受け取れるよう、配慮することが大切である。

深い学びとは、これまでの経験を振り返り、人に伝えたり、経験したことを生かして新たなことに取り組んだりすることだという意見が多かった。すぐには幼児の姿に変化が見られなくても、繰り返して取り組むことで、活動に興味をもったり、見通しをもって活動に参加できるようになったりすることがあるので、教員はそれを見通して保育を計画することが大切である。

#### 4 成果と課題

今回の研究で、保育を行ううえで幼児にとって「主体的・対話的で深い学び」とはどのような活動にあたるのかを、教員一人ひとりが考えることができた。また、協議会を通して、教育センターの方や他の学年の教員の意見をきいたり、自ら保育を振り返ったりすることで、保育の評価につなげることができた。研究を通して次のことを得た。

幼児にとって主体的な活動とは、「やってみたい」「もう一回やりたい」と思えるような活動である。対話的な活動とは、教員や友だちとの会話だけでなく、視線も含めたやりとりのある活動である。これらを踏まえたうえで、幼児にとって深い学びとは、学んだことを自ら活用して取り入れたり、取り組んだことを伝えたりすることである。

そして何より、指導案に幼児の姿を予想し、それに対応する教員の配慮事項などを、観点を意識しながら記載することが「主体的・対話的で深い学び」につながることを改めて感じた。今すぐに深い学びが目に見えなくても、教員がそれを見通して活動を設定することが深い学びにつながる。予想した姿や配慮事項に対し、幼児の反応はどうであったか、改善すべき点はどこにあったかなどを振り返ることが評価となる。その保育を主として進める教員だけでなく、TTとして関わる教員も評価を繰り返し、全ての教員が保育力の向上に努める必要がある。保育を振り返る観点を表に示すなど、これから方法を変えていくことも今後検討していく。以上のことを実現させ、これからの幼児の学びを支えていきたい。



# 主体的・対話的で深い学びの実現～小学部での取り組み～

小学部

## 1 はじめに

2018年度、2019年度は「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」を研究テーマに、基礎的な内容を中心として各学部で実践を行った。小学部においては、独立行政法人教職員行政機構が提示する「アクティブラーニング授業実践事例のピクトグラム（資料1）」から観点を導入して進めた。このピクトグラムは三つの学びをそれぞれ細分化し、具体的な学習活動の観点を示したものであり、「主体的な学び」は5つの観点、「対話的な学び」は7つの観点、「深い学び」は7つの観点が提示されている。一昨年度の指導案の形式は、主体的な学びは●、対話的な学びは■、深い学びは◆の記号を併記することで三つの学びのどの学びに迫るための指導であるかを明確にしたものであったが、昨年度、この5・7・7の観点を導入することによって、授業者が考える“三つの学び”に迫る具体的な指導事例を蓄積することができた。また、事例の中で授業者がどのような観点で指導に取り組んでいるかが明らかになった。しかし、聴覚障がい児教育における三つの学びに迫る指導については、事例の数が不足するためにその傾向及び有効性の確認には信頼性に欠けるところがある。

そのため、今年度も昨年度を踏襲し、一人一回以上、5・7・7の観点を踏まえた指導案を作成し、他の教員から授業評価できる機会を作ることで、聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学びの幅広い実践を蓄積し、そこから指導力の向上にもつなげていきたい。そこで、次のような研究の進め方を設定した。

## 2 研究活動の概要

### (1) 小学部教員全員による研究授業

年次研修対象者は指導案を、その他の教員については指導略案を作成して研究授業を行った。学部内で参観することによって、小学部全体の指導力や研究テーマを踏まえた授業について研鑽する体制を構築した。また、今年度は感染症対策として教員、児童のビデオ撮影を行い、密になる場面を避ける配慮を行った。

### (2) 指導案と授業評価の充実

研究主題を達成するために、指導案や指導略案に、どの観点をどのように授業に取り入れるかを書く箇所を設けた（資料2）。さらに、本時の展開で前述した3つの観点（●■◆）を挿入することで、どの学習活動が三つの学びに結びつくのかがわかるようにし、研究主題を達成する授業づくりの工夫が参観者に伝わるよう工夫した。

また授業を参観する際には、基本的な授業技術、環境のチェックや、研究主題にどれだけ迫ることができたかの評価、コメントによるアドバイスの記入ができるアドバイスシート（資料3）を用いた。また、研究主題の達成に向けてのピクトグラムの各項目に対応する評価欄を新設し、研究授業の振り返りの際に活用し、今後の指導にいかしていく材料とした。

### (3) 学習会

小学部の教員を対象にした学習会を2回実施した。内容は次の通りである。

①「聴覚支援学校小学部における主体的・対話的で深い学びの実現」

形 式 グループワーク

講 師 同志社大学 免許資格課程センター 准教授 中瀬浩一 先生

②「K A B C - II 検査分析結果と実践報告」

報告者 小学部 南 誠、岩戸優香、浅生みゆき、向井 優

「小学部 研究のまとめ」

報告者 小学部 サポート部研究グループ

### (4) 若手教員の会

今年度も新採用5年目以下の教員を対象に3回研修会を実施した。昨年度同様、対象者を3つのグループに分け、各研修会の企画、準備、運営、アンケート集計等を分担しながら進めた。加えて、今年度は実施報告や報告書を作成するようにして、企画力の推進を図った。

○第1回研修会

テーマ 「音楽指導について」

講 師 中学部 山崎知子

内 容 聴覚支援学校における音楽科の指導のあり方について

○第2回研修会

テーマ 「手話表現を学ぶ」(グループワーク)

講 師 小学部 堀谷留美、並木美枝

内 容 適切な手話表現について

○第3回研修会

テーマ 「授業解説」(動画視聴)

講 師 幼稚部 加藤弓子、中学部 富川裕子

内 容 授業における発問の意図と、予想される子どもの反応について

## 3 研究活動の成果と課題

今年度は、6月までの休校措置や、感染症対策を講じた上での研究活動となったが、一人1回の研究授業を進めた。昨年度に引き続いて研究を行うことで、それぞれの教員が5・7・7の観点を踏まえた授業を行うことができた(表1)。本校における授業実践には、主体的な学びの中では、「興味関心を高める」「見通しを持つ」、対話的な学びでは「互いの考えを比較する」、深い学びでは「知識・技能を習得する」の割合が多く、昨年の結果と同じような傾向となった。また、ピクトグラム内の対話的な学び「先哲の考えを手掛かりとする」、深い学びの「新たなものを創り上げる」「知識や技能を概念化する」の3つについては、2年間で取り組んだ教員はいなかった。

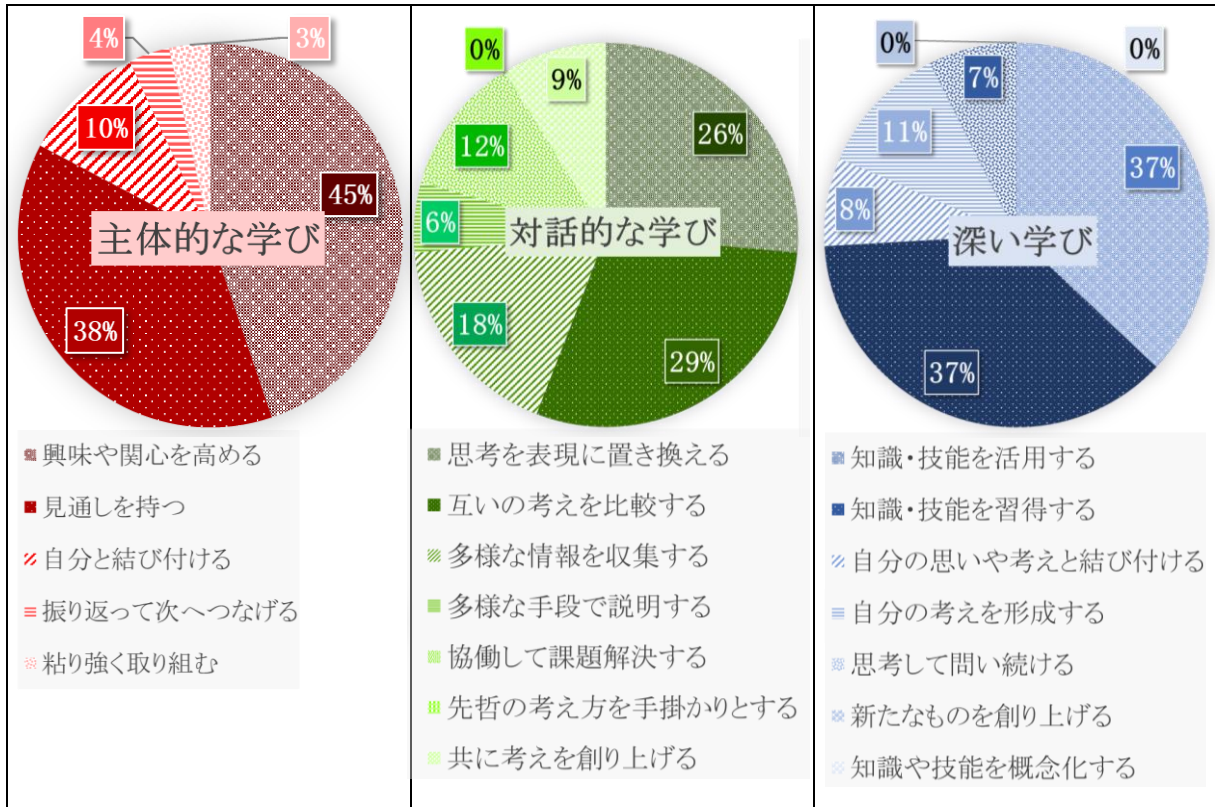
2年間継続してピクトグラムの観点をもとにした授業を行うことにより、授業者がどのように指導したか、その指導方法・技術について蓄積することができ、今後の授業づくりの一助になると考える。今後の展望としては、聴覚障がい児教育での三つの学びは、どのような観点が必要であるのか、また、どのような児童の姿をもとにして達成したと見取るのかを考えていくために本校独自の項目を作成し、聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学びについて考えていきたい。

表1：本校における三つの学びの指導事例（2020年度）



















<p>● 主体的な学び</p>	<p>興味や関心を高める</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ BTB 液を使った実験に取り組みさせる。</li> <li>・ ワークシートを使って、万葉仮名で書かれたことばを当てるゲームを行う。</li> <li>・ 自分の意見をまとめ、相手にわかりやすく説明させる。</li> <li>・ これまで読んできた俳句を振り返り、好きな俳句を見つけるよう促す。</li> <li>・ 話し合い活動で、自分の意見をもって相手に分かるように説明させる。</li> <li>・ いろいろなことばを調べてイメージさせる。</li> </ul>
	<p>見通しを持つ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 問題を解決する方法を考え、伝えられるよう促す。</li> <li>・ 問題文から九九を活用することに気づき、本時のめあてを確認する。</li> <li>・ 目標を設定してから取り組みさせる。</li> <li>・ 基本的な練習後「ゆうやけこやけ」「いちばん星みつけた」の演奏をすることを意識させる。</li> <li>・ ロールプレイングを通して興味がもてるようにする。</li> <li>・ 答えを予想したり、問題を解決する方法を考えたりさせる。</li> </ul>
	<p>自分と結び付ける</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分自身が目指す生き方や社会と SDGs の目標を結び付けられるようにする。</li> </ul>
	<p>粘り強く取り組み</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ヒ音の発音要領を理解し、発音させる。</li> </ul>
<p>■ 対話的な学び</p>	<p>思考を表現に置き換える</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 九九の構成の仕方を自分のことばで説明させる。</li> <li>・ 歌詞から曲のイメージを持たせ表現させる。</li> <li>・ 自分のイメージを自分のことばで説明させる。</li> </ul>
	<p>互いの考えを比較する</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 相手の考えを傾聴し、自分の考えと比較させる。</li> <li>・ 友だちの発表をきき、感じ方の違いに気づかせる。</li> <li>・ 発表を行うことで、自分自身の考えを振り返ったり、新たな課題を見つけたりする。</li> <li>・ 相手の考えを知り、自分の考えとの相違点に気づかせる。</li> <li>・ 相手の考えを聞き、自分の考えとのちがいについて考える時間を作る。</li> </ul>
	<p>多様な情報を収集する</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友だちのつぶやきや指導者のことばかけ、板書から答えを導き出し、発表させる。</li> <li>・ 自分や他者の課題、良い点を見つけられるように促す。</li> <li>・ インターネットなどで調べ学習を行い、発表に必要な情報を収集させる。</li> <li>・ 知っていることばや調べたことばを、やりとりによって分けさせる。</li> </ul>
	<p>協働して課題解決する</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実験結果を共有し、相談しながら結果をまとめさせる。</li> <li>・ グループで実験を行い、結果からわかったことを話し合わせる。</li> </ul>

◆ 深い学び	知識・技能を習得する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水溶液それぞれの性質を理解した上で、発表させる。</li> <li>・ワークシートを使って、万葉仮名を読んだり書いたりする活動を設ける。</li> <li>・基本技の練習を通して、上がり系や下り系の技に発展できるようにする。</li> <li>・音あなの閉じ方運指、タンギングの使い方など基本的な技能を使って、きれいな音色で演奏できるよう指導する。</li> <li>・自身で調べたり、問題に答えたりすることで知識を身につけさせる。</li> </ul>
	知識・技能を活用する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・九九の性質やきまりを既習のことばでまとめさせる。</li> <li>・基本技の練習を通して、上がり系や下り系の技に発展できるようにする。</li> <li>・ヒ音を使った文章を作り、発音要領を意識しながら発音させる。</li> <li>・調べたこと、知っていることを文作りにつなげさせる。</li> </ul>
	思考して問い続ける	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物事を多角的に捉えられるように発問する。</li> <li>・具体物を動かすことによって、物事を多角的に捉えられるようにする。</li> </ul>
	自分の考えを形成する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題に対して、わかったことを自分のことばでまとめさせる。</li> <li>・情報収集や意見交換などの活動の中で考えを深め、自分自身が目指す「サステナブルな社会」を提案し、発表させる。</li> </ul>

図1：本校の授業実践事例の傾向（2019,2020年度 累計）



資料1 独立行政法人教職員行政機構よりアクティブラーニング授業実践事例のピクトグラム

主体的な学び	対話的な学び	深い学び
 <p>興味や関心を高める</p>	 <p>互いの考えを比較する</p>	 <p>思考して問い続ける</p>
 <p>見通しを持つ</p>	 <p>多様な情報を収集する</p>	 <p>知識・技能を習得する</p>
 <p>自分と結び付ける</p>	 <p>思考を表現に置き換える</p>	 <p>知識・技能を活用する</p>
 <p>粘り強く取り組む</p>	 <p>多様な手段で説明する</p>	 <p>自分の思いや考えと結び付ける</p>
 <p>振り返って次へつなげる</p>	 <p>先哲の考え方を手掛かりとする</p>	 <p>知識や技能を概念化する</p>
<p>2020年度 研究活動資料</p>		 <p>自分の考えを形成する</p>
 <p>協働して課題解決する</p>		 <p>新たなものを創り上げる</p>







## 資料3 (アドバイスシート)

2020 年度 研究活動						
網掛けの部分に入力してください。						
授業者						
日時		月		日		時間目
教科						
指導案に載せている項目にチェックを入れてください。						
<input type="checkbox"/>	主体的な学び	1	興味や関心を高める			
<input type="checkbox"/>		2	見通しを持つ			
<input type="checkbox"/>		3	自分と結び付ける			
<input type="checkbox"/>		4	粘り強く取り組む			
<input type="checkbox"/>		5	振り返って次へつなげる			
<input type="checkbox"/>	対話的な学び	1	互いの考えを比較する			
<input type="checkbox"/>		2	多様な情報を収集する			
<input type="checkbox"/>		3	思考を表現に置き換える			
<input type="checkbox"/>		4	多様な手段で説明する			
<input type="checkbox"/>		5	先哲の考え方を手掛かりとする			
<input type="checkbox"/>		6	共に考えを創り上げる			
<input type="checkbox"/>		7	協働して課題解決する			
<input type="checkbox"/>	深い学び	1	思考して問い続ける			
<input type="checkbox"/>		2	知識・技能を習得する			
<input type="checkbox"/>		3	知識・技能を活用する			
<input type="checkbox"/>		4	自分の思いや考えと結び付ける			
<input type="checkbox"/>		5	知識や技能を概念化する			
<input type="checkbox"/>		6	自分の考えを形成する			
<input type="checkbox"/>		7	新たなものを創り上げる			



大阪府立中央聴覚支援学校小学部 授業アドバイスシート

年 月 日 曜日 時間目 教科 ( ) 授業者( )

	チェック項目	✓		チェック項目	✓
1	児童は、授業の準備（教科書など）ができています。		11	明確でわかりやすい指示や説明をしている。	
2	安心して授業に集中できる雰囲気がある。		12	児童に顔や口が見えるように注意している。	
3	私語をしない・話をしている人の方を見るなどの学習規律が徹底している。		13	児童に伝わりやすい方法（手話、指文字、音声など）で表現している。	
4	事故防止に努め、安全への配慮を行っている。		14	板書をわかりやすく工夫している。	
5	互いの顔が見えるような机の配置になっている。		15	考えを発表したり書いたりする場面を設定している。	
6	指導案が適切に作成されている。		16	児童の発表や説明を尊重して授業を行っている。	
7	導入を工夫している。		17	教材やワークシートを適切に活用している。	
8	めあて（目標）を提示している。		18	児童の実態に合わせて指導助言を行うなど、適切な対応をしている。	
9	時間配分がうまくできている。		19	適切に授業のまとめをしている。	
10	話す速さが適切である。		20	TT（チームティーチング）を適切に活用している。	

評価は、◎…十分達成されている ○…概ね達成されている △…努力が必要 で記入してください。

項目	内容	評価	研究テーマに関連したアドバイス（気づいたこと）
主体的な学び	1		
	2		
	3		
	4		
	5		
対話的な学び	1		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
深い学び	1		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
その他			

記入者( )

## 教科で取り組む、主体的・対話的で深い学びについて

### ～指導要録改訂で、より主体的な国語科の取り組みの実践報告～

中学部

#### 1 はじめに

平成から令和になる年度、私たち国語科教員は頭を悩ませていた。「主体的に学習に取り組む態度」をどのように評価していくのか。評価の前に、果たして私たちの授業は、生徒の主体性を重んじて授業をしているのだろうか。生徒自ら主体的になるには、今までの私たちの授業を見直さなければならないと思うようになった。

#### 2 研究目的

昨年度の研究では、総合的な学習で主体的な取り組みを実施した。その取り組みに関しては、今年度は、道徳も含め、学年を超えて縦割りグループで実践している。アンケート結果をみても、他学年と取り組むことや、生徒たちに司会進行などすべてを任せることにし、かなりの成果がでている。しかし9教科での主体的な取り組みも考えていかなければならないと感じていた。今年度、国語科の取り組みを全日叢研で発表することもよい機会をとらえ、最終的には、国語科だけではなく、他教科に波及できるような研究にしたい。

#### 3 研究方法

下記の昨年度の報告より、網掛けの項目について着目して、実践する。また、この枠内の資料は昨年度のものであり、1組は社会的自立のための学習を重視する課程、2組は準ずる課程である。

今年度の研究報告から、「主体的に参加する授業を作るためにはどのような工夫が必要でしょうか」のアンケート結果から、今年度に受けた研修、開催した研究会のテーマや日時は次のとおりである。

第一回校内研究会： 8月23日 木曜日

「聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学び」

井坂行男 先生（大阪教育大学教授）

中・高教職員研修会： 12月21日 金曜日

「主体的・対話的で深い学びのある授業をつくるためには」

原雅史 先生（大阪市立東三国小学校長）

第二回校内研究会： 2月15日 金曜日

幼稚部「子どもが主体的に遊び、学びに向かう力を育む保育づくり」

小学部「主体的・対話的で深い学びの実現 - 小学部での取り組み -」

これらの研修・研究会での学習とは別に、中学部教員を対象にアンケート調査を行った。アンケートは「主体的・対話的で深い学び」に関する内容で、質問の詳細は表1の通りである。中学部には社会的自立のための学習を重視する1組と、準ずる課程に対応して学習が進む2組がある。「主体的・対話的で深い学び」のテーマはどちらの生徒たちにとっても同じように重要であるが、求められる内容や方法には違いがあると予想されるため、質問への回答は1組と2組に分けて求めることにした。

表1 質問項目の詳細

①	生徒が「主体的・対話的」に参加する授業を作るためには、どのような工夫が必要でしょうか？
②	転任者や、まだ手話が得意ではない教員が、(生徒と授業者教員との)「対話的」な授業場面を作り出すには、どのような方法が考えられますか？
③	「深い学び」とは、生徒がどのような状態に到達することだと思いますか？

3 結果と考察

質問① 生徒が「主体的・対話的」に参加する授業を作るためには、どのような工夫が必要でしょうか？について

主体的	1・2組 共通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少し難しい課題を設定する。</li> <li>・簡単な課題だけでなく難しい魅力のある課題を用意する。</li> </ul>
	1組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・興味をもてるような視覚的で楽しい教材を使う。</li> <li>・生徒からのことばの意図をくみとる。</li> <li>・伝えたいことが伝わった経験を積ませる。</li> <li>・自分で考えて、体を動かす。</li> <li>・興味をもって取り組めるための導入。</li> <li>・あいさつから担当生徒を決め、自分たちでやるという意識を作る。</li> <li>・課題を与え、自分で考えさせる。</li> </ul>
	2組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワークの活用。</li> <li>・考えさせる発問の活用。</li> <li>・授業の「ねらい」に生徒が近づいていくことができるよう、よく練った質問を準備する。</li> <li>・自らの考えを伝える力を育てるために、授業内で小さなステップを作っていく工夫。</li> <li>・積極的に参加でき、記録向上などに意欲的になれる教材の選択や声かけの工夫。</li> <li>・対教師、生徒間での対話を通し、意見の違いや話し方等を学ぶことができるための工夫。</li> <li>・自分の意見を発表できる授業作り。</li> <li>・自分から進んで勉強していけるような授業計画作り。</li> <li>・反転学習を活用し、自ら予習したくなるようにさせる工夫。</li> </ul>
対話的	1・2組 共通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒同士話し合っって考えられるように発問する。</li> <li>・どの生徒も発表できるような設問を作る。</li> </ul>
	1組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他生徒と協力して作業できる教材を作る。</li> <li>・席の配置を工夫して対話しやすい環境を作る。</li> <li>・他者の意見を知る、聞くためのサポートを行う。</li> <li>・チームを作る時など、自分たちで相談し決めるように促す。</li> <li>・教員が生徒の考えや出来事を引き出す工夫。</li> <li>・選択肢のある質問を用いて、生徒が「答えることができる」という経験から始められる工夫。</li> <li>・友だちと考えを共有することを大切にさせるための工夫。</li> </ul>

	2組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワークの活用。</li> <li>・発表のしやすいクラス環境を作る。</li> <li>・教員が話しすぎないようにする。</li> <li>・他者の意見の要点を理解できるようにサポートする。</li> <li>・記録向上や、良い演技を作るためにお互いにアドバイスしあえるように授業をデザインする工夫。</li> <li>・意見を出し合うディスカッション式の授業作り。</li> <li>・生徒同士で登場人物の気持ちを想像させる工夫。</li> <li>・選択肢のある質問だけでなく、自分で考えて答えることが必要な質問を準備する。</li> <li>・予習した内容から課題に取り組むことができる授業作り。</li> </ul>
--	----	--

「主体的」に参加するための工夫の中で1・2組に共通して言及されていることは、簡単な設問だけでなく難しい問題を活用することであった。他の回答からも分かるように、「主体的」とは自ら考える・考えようとする意欲に関係するため、生徒が少し立ち止まってじっくりと考える場面の設定が大切になってくると思われる。

「対話的」に参加するという観点では、生徒たちが話し合う場面の設定が重視されている。そのためにディスカッションや発表、グループワークのようなしかけの活用が想定されている。また、対話がしやすい座席配置のように教室環境の整備も必要である。

#### 4 実践報告

##### (1) 「対教師、生徒間での対話を通し、意見の違いや話し方等を学ぶことができるための工夫」「意見を出し合うディスカッション式の授業作り」～フラットな話し合い～

日本人はディスカッションが苦手であると言われている。テーマを真ん中において、意見を言い、折り合いをつけながら、結論を出す、このシンプルなことがなかなか難しい。教員自身が講義形式の授業を受動的に受け、暗記し、ペーパーテストを受けるというルーティンをしてきており、「意見を言う」または、自分の頭で考えて意見を言う機会が少なかった可能性がある。そういう視点に立って、より対話的な授業ができるように、まず「てつがくカード」を実施してみることとした。

聴覚障がいのある支援学校は生徒が減少しており、しかもグループ別学習をしていることもあり、少人数で学習している学校が多い。勿論少人数で学習しているからこそ、きめ細かい指導が提供できているのだが、ディスカッションなどに関しては弱い。実社会でも聴覚障がいのある人が他者とのディスカッションに参加することがなかなか難しいことも、授業で取り組まない要因でもある。しかし手話言語条例や、新型コロナウイルス感染拡大の状況下、リモート会議などで聴覚障がいのある人にも参加しやすい環境ができてくるとは思われる。

さて、ディスカッションをする上で大切なのが、相手の意見を尊重することであるが、これは大人でも難しい。相手を尊重するには、いったいどのようにしたらいいのか、その答えの1つとしてたどり着いたのが「てつがくカード」である。

オランダのイエナプランについて調べた際にでてきたのが「てつがくカード」である。幼少期からこのカードを活用して学んだ子どもたちは自由な発想、自分の頭で考える習慣がついているということ、周りから否定されないし、意見を強要されることもない。そのようなことが、幼いころから培われていたら、相手を尊重することができるのではないかと考え、活用してみることとした。

年度	内容	効果
昨年度	中学3年 ・てつがくカード ・「企画会議」ディスカッション 例「テストについて」など	・当初は日頃発言を活発にする生徒のみが意見を出していたが、学習回数を重ねるごとに、発言の少ない生徒も意見を言うようになった。 ・多様な意見を聞く姿勢が培われた。
	中学2年 ・てつがくカード ・てつがくおしゃべりカード	・黒板にそれぞれの意見を書き、多様な意見がある事を互いに話して実感する。
	中学1年 ・てつがくカード	・「色々な意見があってもおもしろい」との発言が得られた。
今年度	中学3年 ・「企画会議」ディスカッション 例「フロンを規制するのもしないのか」など	・1回目では意見の対立が顕著だった。 ・改善点を話したのちに実施した2回目は、どちらの意見も合わせた結論を出した。
	中学2年 ・俳句、与謝野晶子の探求学習 「女性をしばっていた道徳について」	・女子だけで話していた時も多様な意見であったが、学年全体でディスカッションしたことにより、多角的に意見が出て、自分の意見を見つめ、柔軟な話し合いができていた。
	中学1年 ・三角ロジック 例「校則はある、いない」など	・インターネットで校則のことを調べ、いるいらないを自分で選択し、その後に自分とは違う立場でディスカッションしたことにより、自分とは違う立場で意見を言い、より、違う意見を取り入れるきっかけとなった。

また、全学年とも「てつがくカード」のルールに則って話すだけで、徐々にフラットな話し合いがなされていった。その成果を受け、今年度は、国語以外の教科、総合の授業でも「てつがくカード」を年度当初に実施し、取り組みを進めた。

考察としては、「否定されないし発言を強要されない、正解はない」というようなことが、発言を促す結果になったのではないと思われる。

今年度の中学3年のディスカッションの効果を見ると、どちらかを採用するのではなく、融合した結論に至ったのは、昨年度からディスカッションのために「てつがくカード」に取り組み、今年度の総合でSDGsを取り組み、また文化祭で自分たちで議論しながらまさに、ゆずり合い自分たちで話し合ってきた成果であろう。また、2学期期末考査では、条件作文のテーマを「企画の進め方のコツ」とし、生徒たちが企画会議においてどのように、変化していったか、生徒たち自身に考察をさせた。

生徒A 「その人が言った意見に対し、あからさまに否定せず、その人が言った意見に寄りそい、中和させる考えが大事だと思います。(後略)」

生徒B 「私は自分の意見以外はよく否定してしまいます。その理由は自分の意見しか目になからずです。しかし国語の授業を通して否定せず受け入れるとより良い意見ができました。

今後は否定しないことを意識したいです。」

以上の文章からみると、一定、ディスカッションでの意義を身につけつつあるのではないかと考えられる。また、かなり主体的に対話していったこともあり、達成感を味わったと思われる。そして、意見の相違を受け入れたほうが良い意見ができた、という点が、多様性を理解したほうが意見や考えが深まっていくことを実感できているといえる。自分と異なる意見を受け、改善していくというポイントはこれからの社会を生きていくうえで大切な考え方である。

(2) 「教員が話し過ぎないようにする」～文章問題を解説した先に見えたもの～

今年度、中学部2年生の授業では、臨時休校中の課題の文章問題を正答した生徒に解説をしてもらうという試みを実施した。はじめは恥ずかしさもあり、電子黒板の方を向いて解説をしたり、答えのみを言っていたり、解説というにはほど遠いありさまだった。しかし相手に分かるように解説することを毎回の授業で教員から生徒へ伝え、生徒が「分かりやすかった」と感想が多かった生徒の解説の後に、よくできたところを話し合わせたりする中で、日々上達していった。

具体的な成果としては、生徒たちが、文章内の語句を解説する際に、例えば「客観的な～」の意味を主体的に調べ、「客観的の対義語は主観的なので、この文章中の～」と説明をしていくことがあった。ワークブック内で意味調べの項目があるので、宿題として意味調べをしているが、それは主体的とは言いがたい。このように、発表することで、自ら進んで調べることは、主体的と言えよう。教員が説明するのではなく、生徒が説明をすることで、生徒自身の学習への態度が変わっていった。

(3) 「考えさせる発問の活用」「自分から進んで勉強していけるような授業計画作り」  
「グループワークの活用」～探求学習～

年度	内容	効果
今年度	中学2年 ・古文「枕草子」 情景が浮かんでくる発表	・プレ発表で得たアドバイスを取り入れて、よりよい発表ができた生徒が多かった。 ・古語の意味をより理解したいと考え、「月のころはさらなり（言うまでもない）」「またさらでも（そうでなくても）いと寒きに」の違いを理解し発表していた。 ・「言うべきにもあらず」などの二重否定などについて、表現を考えていくうちに、古語の理解を深めていった。
	・論説文『人間はほかの星にすむことできるのか』 表題にもなっている問題提起の結論を自分で考察し発表する。	下記参照
	・論説文『壁に残された伝言』 意味段落で別れた箇所をグループ学習で解き明かし発表する。	・分からない漢字はも自らすすんで漢字辞典で調べたり、意味の分からない語句は国語辞典で調べたりしていた。「発表をするから語句の意味を知っておきたい」という内側から湧き出る内発的動機付けができていったと思われる。 ・わかりやすく伝えようとし、絵を描いて表現したり、グループ内で話し合っ発表内容を決めたりするようになった。

中学2年論説文『人間はほかの星にすむことできるのか』については、自分ひとりの力で探求し、自分で結論を発表するという学習に取り組んだ。

生徒たちは、インターネットを活用したり、理科の教員に質問したり、もちろん教科書を読んだ生徒もいた。自由に探求させ、発表のスタイルも「相手に分かるように」という指示のみにした。生徒たちは、いろいろ調べ、互いに情報共有しながら、自らの力で結論へ進んでいった。発表の方法は、手話のみ、紙に書く、タブレット、パソコンなど、様々であった。発表後生徒たちからは、「放課後に残って発表の修正をしたい」と申し出があった。発表をふまえ、「自分の発表をもっとわかりやすくしたかったからである」と生徒は話していた。放課後活動では生徒は、地球の重力と他の星の重力を比較するために、タブレットでイラストを描いて発表用のスライドを作成していた。繰り返し発表の練習をしている生徒や、「もっと木星のことを調べる」と言って、さらに調べている生徒がいた。教員から「調べなさい」と言わなくても、発表する、情報共有するという関心意欲という課題があれば自ずと生徒たちは生き生きと探求するのである、と国語科教員で確認した瞬間であった。そして、生徒たちが「プチ博士」となった瞬間でもあった。

## 5 研究活動の成果と課題～今まで通りの一斉授業、講義形式でなくても子どもは主体的に学ぶ～

昨年度アンケートに基づき、様々な取り組みを実践してきた。国語科では、いろいろな手法の学習を取り入れた。生徒たちは、教員が一斉授業で事細かに教えなくても、興味があれば調べるし、わからなければたずねることがよく分かった。もちろん、一斉授業での学習は必要である。知識面に関しては一定伝えなければ探求学習や意見を持ったり話し合ったりできないからだ。中学2年の教科書に出てきた「煤」を生徒たちは読みもわからなければ、意味も分らなかった。しかし「わかりたい」と思い、生徒たちは必死で辞書をひいていた。いかに興味をもって主体的に授業に参加させるか、知的好奇心の塊である生徒たちに教えられた気がする。

生徒たちは、人の話を聞き、文章を読み、情報を入れ、そしてそれに加え、自分の考えをまとめ、伝えるという、いわゆる批判的思考力をつけていくこと、それが我々教員のめざす生徒像の1つである。上記の実践報告で述べた、探求型学習やディスカッションの中で、それらの力が養われると考えられる。受け身な人間ではなく、自分で考え、意思決定でき、修正や改善をしながら生きていく人間を育てていくひとつの手段として、生徒同士で考え、答えを探し、情報を共有していくこの学習方法が有効であると考えられる。他の教科でも、主体的で対話的で深い学びを実践していくうえでの1つのささやかな参考になることを望んでいる。それとともに、教員も生徒同様、修正や改善をするために、答えを探し、情報を共有し、学び続けることは必須である。実は生徒より教員にこそ、必要な課題なのかと考えられる。

## 6 参考資料



# アクティブラーニングを取り入れた授業の実践と今後の課題

～近畿聾教育研究会（高等部研）をとおして～

【数学科】

高等部 前田優香

## 1 はじめに

社会自立をめざしたアクティブラーニングの視点を取り入れた教科指導を数学科で行うにあたり、数学的解説と問題演習に陥りがちな授業に対する問題提起は必然である。そこで、生徒と教員の相互間だけでなく生徒同士で思考し、また、手を動かすことで体感できる授業を計画した。以下は、その学習指導案と報告である。

## 2 学習指導案（略案）

(1) 高等部 第2学年（特別進学コース）3名

(2) 単元名 「不思議な性質をもつ数列」

(3) 単元目標

- ・フィボナッチ数列を知る。
- ・数学の不思議や美しさを感じる体験をする。
- ・数学的活動の楽しさや数学のよさを実感し、それらを活用して考え判断する。
- ・数学に対する興味と関心を高める。

(4) 生徒観

本クラスは、大学進学をめざしたカリキュラムに基づき授業を実施している。生徒の授業態度は真面目かつ、理解しよう、理解したいという気持ちが見受けられるが、数学に対しての苦手意識が強い。基礎力及びその場の理解力は高いが、内容の定着が難しく、範囲の決まった小テストや定期テストにおいては得点できるが、模試での得点は伸び悩んでいる。

(5) 教材観

数列の単元の学習に入り始めた段階である。数研出版の教科書『新編数学B』を使用しながら、教員自作のプリントで授業を進めている。教科書81ページにコラムとして「不思議な数列」が半ページに渡り紹介されている。また、教科書の裏表紙にはヒマワリや階段の写真が、67ページの第3章数列の扉絵には巻貝の写真が掲載されている。これらの写真と数列の関連を理解するために、具体的な課題学習による実証的な学習活動を展開したい。

(6) 指導観

今後の数列の学習に対する意欲を掻き立て、更には数学に対する興味・関心を高められるよう指導したい。「フィボナッチ数列」を題材に発展的な授業を行う。

(7) 題材の評価規準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
① フィボナッチ数列の規則を理解し、数列を書き記す。	① フィボナッチ数列と黄金比の繋がりが判る。 ② 自然界における数列を認める。	① ウサギのつがいや階段の問題について予想をたてる。 ② 黄金比を算出する。 ③ 紙で黄金長方形を作る。

(8) 単元の指導と評価の計画（全2時間、本時は第1時）

次	時	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
1	1	・フィボナッチ数列を理解し、身の回りや自然界に数列が関係していることを知る。	・フィボナッチ数列を書き出し、規則を導く。 ・ウサギのつがいや階段の上り方の問題について考える。 ・黄金長方形を作る	・手話やICT機器の活用による情報保障を行う。 ・生徒の発言を	[A] [C] [B]



	2	・日本では、白銀比が多く利用されていることを知る。	・黄金比を算出する。 ・自然界の数列を確認。	促し、思考力を引き出す。	[C] [B]
--	---	---------------------------	---------------------------	--------------	------------

(9) 本時の展開

①本時の目標

フィボナッチ数列について理解し、数学の不思議や美しさを感じる。

②本時の評価規準

フィボナッチ数列を書き出すことができる。ウサギのつがいや階段の問題について予想する。

③本時で扱う教材・教具

数研出版『新編数学B』、ワークシート、プレゼンテーションソフト、タブレット、モニター、A4用紙、コンパス、定規

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び支援の手だて等	評価規準（評価方法）
7分 導入	1. 教科書のフィボナッチ数列に関する写真を閲覧する。 2. 数列の規則性を発見する。	◇ 教科書の写真と数列が関係することの不思議さを感じさせる。 ◇ フィボナッチ数列を第8項まで見せ、その続きを考え、書き出させる。	[A] フィボナッチ数列の規則を予想し、数列を書き出すことができる。 (発表、ワークシート)
30分 展開	3. フィボナッチ数列を一般化する。 4. ウサギのつがいの問題を考える。 5. 階段の上がり方の問題を考える。	◇ 数列の一般式を求め、数列に関する記号に慣れさせる。 ◇ フィボナッチ数列の歴史背景に触れ、数学の学習体験の幅を広げさせる。 ◇ つがいの問題をかみ砕き、箇条書きにした文章を示すことで、理解を支援する。 ◇ つがいの問題を図式化して示し、ウサギの増え方を予想させる。 ◇ 階段の上がり方を数える上でのルールを簡潔に示し、問題理解を支援する。 ◇ 1段目から4段目までの上がり方を順に考え、解決させる。 ◇ 5段目以降も同じように考えられることに気づかせる。	[C] ウサギのつがいや階段の問題について理解し、予想できる。 (話し合い、ワークシート)
8分 まとめ	6. フィボナッチ数列の成り立ちをまとめる。	◇ ウサギのつがいが1年後に何組になるかを求め、フィボナッチ数列との関連に気づかせる。 ◇ 階段の上り方を一般式で示し、フィボナッチ数列との関連に気づかせる。	
5分 補足	7. 黄金長方形を作る	◇ A4用紙（白銀比の紹介）を使用し、正方形の連続で黄金長方形を作る。縦横比の計算結果を確認し合う。	[B]

3 授業を終えて

見学した教員からは、「数列という難しいイメージがあったが、興味深い内容にひきこまれ、自分も生徒の立場で授業を受けたいと思った」、「高校数学を難しく感じる生徒が多い中、生徒が目

をきらきらさせて作業に取り組む様子が印象的だった」というような肯定的な意見をいただいた。生徒の表情が生き活きとしていく様子を授業者自身も感じ取ることができ、数学を苦手とする生徒が多い状況下で、授業が楽しいという感想を持てることは重要であると改めて思うに至った。

数列の授業カリキュラムにおいて、フィボナッチ数列の2時間を要すること自体が実験的である。やるからには充実したものになるよう趣向を凝らしたいと考えた。ウサギのつがいや階段の問題の理解にはもっと時間を割くと想定していたが、予想以上に生徒の理解度が高く、加えて、紙で黄金長方形を作成する課題までしっかり取り組めたことが、授業に深みを与えた点で良かった。

#### 4 現在の取組みと今後の課題

数列の授業を本格的に始める前にフィボナッチ数列を題材としたアクティブラーニングを意識した授業を盛り込んだことで、生徒は数列に親しみを持つことができるようになった。数列も他の数学の分野と同様に公式の暗記だけに陥りがちである。しかし、本授業を体験した生徒たちは公式一つひとつの意味を読み解くことにスムーズに対応し、真の意味で数列を学ぶことができたと言える。この点で授業者の目論見通りになったことはありがたい。現在3年生になった彼らは数学Ⅲを学習しており、多くの公式に直面している。多大過ぎるゆえ、暗記し計算に慣れるしかないのが数学Ⅲであるのだが、授業に前向きで教科書の練習問題程度であれば、難なく解くことができている。

また、数学は2年生に入ると公式が徐々に教科書を埋めてくる。それが理由となり、数学離れが加速する時期でもある。そこで、数列は2年生で学ぶ数学Bの後編に登場するが、2年生の夏休み前、1学期末テスト後の余裕のある時期に特別授業的扱いで、フィボナッチ数列をアクティブラーニング的に持ち込むことを提案したい。

フィボナッチ数列に2時間も割くことに、実は当初不安もあった。しかし、生徒たちは上澄みだけでない数列を学ぶ機会を得られた上に、数列から数学Ⅲへの移行が無理なくできたことから、意義があったと考える。さらに、歴史的見地から数学を俯瞰する経験を自ら学ぶ姿勢で行えたことは、生涯学習の立場からも有益である。

# アクティブラーニングを取り入れた授業の実践と今後の課題

～近畿聾教育研究会（高等部研）をとおして～

【英語科】

高等部 前堀薫

## 1 はじめに

外国語の学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、児童生徒の学びの過程全体を通して、知識・技能が実際のコミュニケーションにおいて活用され、繰り返し思考・判断・表現することで獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である。

今回、先に述べたような能力を育む授業展開するにあたり、英語に対する苦手意識を軽減することが課題と捉え、コミュニケーション英語Ⅱの導入部分では、挿絵や写真、タイトルについて日本語と英語で1分程度のチャットをすることで内容を予想し、生徒自ら興味や関心を持たせるようにした。

また、各単元の文法のまとめでは、英文の基本的な表現のベースとなる文法記号（S、V、O、C）を使用し、文型を一つひとつ丁寧に確認することで難しい表現への抵抗を和らげ、語彙力、表現力を高める。

上記2点に加え、見てわかる自作教材プリントを電子モニターに表示することを中心とした授業展開をし、生徒たちが感性を豊かに働かせ、自らの意見や考えを書いたり話したりできるアクティブラーニングの視点を取り入れた授業を実践することにした。

## 2 学習指導案

(1) 高等部 本科第2学年（「アパレル情報科」グループ） 2名

(2) 単元名 Lesson 7 「Fuji, a Dolphin With a New Fin」

教科書 『Revised COMET English Communication II』（数研出版株式会社）

(3) 単元目標

- ・イルカのフジヤ、フジを助けようとした人々に関する本文を読み、フジの身にどのようなことが起こったかについて理解する。
- ・過去完了形(had+過去分詞)の基本的な用法(大過去/継続/完了/経験)について理解したうえで、1文を完成させる。
- ・「感想を尋ねる表現」を用いて、場面に合ったやり取りをする。

(4) 生徒観

本グループは、落ち着いて学習に取り組んでおり、積極的に発言もできている。困っているときはお互いにフォローし合うなど、和やかな雰囲気ของกลุ่มである。

英語に対する苦手意識があるが、導入部分では今までに見たり聞いたり、経験したことを活かし、各題材内容を理解しようとする様子が見受けられる。

各単元の文法のまとめでは、高等学校1年程度の内容を理解していても、難しい表現に戸惑うことがあるが、文法記号（S、V、O、C）を使用し、一つひとつ丁寧に確認することで、本文の内容をスムーズに理解している。

また、主に使用される動詞や英文中の語順を見やすくまとめたプリントを使って学習することで、難しい表現への抵抗を和らげ、理解を進めている。更に関連する語彙や英語の表現を習得しながら、語彙力、表現力を高めていくことが本グループの生徒たちの今後の課題である。

(5) 指導観

指導にあたっては、学習内容を身近に感じられるようにする。自分の考えをまとめることで言語活動を充実させ、生徒の思考力・判断力・表現力を高める指導を行う。具体的な指導にあたっては、次の点に留意したい。

- ①身近な動物を通して、病気やけがで身体の一部を失ってしまったり、動かすことができない

くなったりした動物たちがどのようなケアを受け、輝きを取り戻したのかを、動物に愛情を注ぐ獣医やサポートするエンジニアたちの活動を説明することで、人と動物がどのように共存していくかを学ばせたい。その中でどのような職業が関わっているのかにも興味をもてるようにする。

- ②過去完了形 (had+過去分詞) の大過去、継続、完了、経験の4分類を現在完了形と比較しながら、使い分けを理解させる。また、ワークシートに文法記号 (S、V、O、C) を用いて、文型を一つひとつ丁寧に確認することで、学習内容をスムーズに理解できるようにする。
- ③事前課題として調べ学習を課すことで、生徒がより主体的に家庭での学習に取り組めるよう促す。また、授業においては事前課題について発言し合うことで、対話的な学習機会を設ける。

(6) 題材の評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
①イルカのフジや、フジを助けようとした人々について関心を持ち、積極的に発言しようとしたり、聞こうとしたりしている。 ②ペア・ワークなどのコミュニケーション活動に積極的に参加しようとしている。	③発音と文のリズムに注意して英文を読むことができる。 ④本文の内容を簡潔にまとめて話すことができる。 ⑤本文の内容に関連して、自分の意見を簡潔に話す/書くことができる。 ⑥過去完了形(had+過去分詞)の基本的な用法(大過去/継続/完了/経験)を用いて、正しい文を書くことができる。 ⑦「感想を尋ねる表現」を用いて、場面に合ったやり取りをすることができる。	⑧本文中の代名詞が指す内容や注意すべき意味について理解できる。 ⑨【Part 1】イルカのフジのひれにどのようなことが起こったかについて理解できる。 ⑩【Part 2】フジの泳ぎを取り戻すために植田さんが何を思いついたか、また加藤さんやほかの技師がどんな行動をとったかについて理解できる。 ⑪【Part 3】フジがジャンプするためのひれの開発の過程と、その結果について理解できる。	⑫過去完了形(had+過去分詞)の基本的な用法(大過去/継続/完了/経験)を理解している。 ⑬水族館の飼育員や獣医の仕事についての知識がある。 ⑭動物と人間が共存できる自然環境を守ることの大切さを知っている。

(7) 単元の指導と評価の計画 (全7時間、本時は第1時)

時	学習内容	評価規準			
		コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
第1時 【本時】	1. タイトルや扉の写真から推測される本文の内容について、教員と生徒が簡単な英語でやり取りする。 2. Warming Up の語句の意味を確認しながら、英語で発音する。 3. 発音のヒントの解説を踏まえて Let's Listen! 及び(Q)を聞き、発音の違いを理解する。	①・②			⑬・⑭

<p>第2時   第6時</p>	<p>1. <b>New Words</b> や脚注を用いて、単語・連語等の意味や発音を確認する。  2. 本文の音声を聞き、それをモデルとして音読練習をする。(コーラス・リーディング、ペア・リーディング等)  3. <b>Points to Check</b> を用いて、本文中の代名詞が指す内容や注意すべき意味を確認する。  4. <b>Comprehension</b> を用いて、本文の要点を確認する。  5. <b>What Do You Think?、How About You?</b> を用いて、沖縄について知っていることや余暇の過ごし方、どんなときに"<b>I[We] did it!</b>" と言うかについて聞き、自分の知識や経験について簡単な英語で話す。</p>	<p>[5] ②</p>	<p>[2] ③ [4] ④ [2] ⑤</p>	<p>[3] ⑧ [4] ⑨ [4] ⑩ [4] ⑪</p>	
<p>第7時</p>	<p>1. <b>Grammar</b> の解説を読みターゲットとなる文法事項を理解し、<b>EXERCISES</b> の設問に解答する。  2. ペア・ワークによって <b>Useful Expression</b> の表現を定着させる。  3. リスニング問題は英文の音声スクリプトを読み取りとして代用し、解答する。</p>	<p>[2] ②</p>	<p>[1] ⑥ [2] ⑦</p>		<p>[1] ⑫</p>

### 3 授業を終えて

今回の研究授業にご参加いただいた他校の教員からは、「丁寧な授業だった。本文に入る前に、物語の背景についてしっかりと説明しておくことの大切さを再確認することができた。」「発音の上手さに関係なく、積極的に声を出して、読む力の育成を行っていききたい。」というご意見をいただいた。

今回の授業方法は、英語に対する苦手意識のある生徒だけでなく、どの生徒たちにも今までに見たり聞いたり、経験したことを情報発信できる状況作りを基本とした。社会に出た際に自分のことばで積極的に発言できるようになってほしいという思いもあり、以前から継続して指導の留意点にしている。

今後は教員の支援を少なくし、生徒自ら積極的に内容や場に応じた発表や発言ができるよう指導を行い、活動しやすい環境づくりを続けていきたいと改めて思える機会となった。

### 4 現在の取組みと今後の課題

課題となる「英語に対する苦手意識の軽減」以前に、日本語力の不足も痛感している。また、お互いの意見を知り、その意見に対して自分の意見を伝える力の定着も必要である。

そのため、教科書を開く前に、「新出語句で内容の予想」を取り入れることにより、挿絵や写真、タイトルに対して簡潔な英語を用いて「1分間チャット」の活動がスムーズに行えるようになってきた。

今後は学習内容や生徒の反応を見て、指導にあたり「インプット中心/アウトプット中心」を適切に選択し、バランスよく「4技能」の力をつける活動に繋げていきたい。

# アクティブラーニングを取り入れた授業の実践と今後の課題

～近畿豊教育研究会（高等部研）をとおして～

【美術・工芸科】

高等部 藤戸朝子

## 1 はじめに

本校高等部では主体的・対話的で深い学びの実現のための「アクティブ・ラーニング」の視点を教科指導の活性化に取り組み、実践、研究している。重視していることは、「生徒が判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べること」「生徒の自己肯定感や学習意欲、社会参画の意識の向上」「どのように学ぶか」という学びの質や深まり」「学習の成果として“どのような力が身についたか”に関する学習評価のあり方」である。

美術や工芸は生徒が主体的に取り組み、表現することが本来、重要である。小学校高学年ごろから技術的な面に意識が偏りやすくなることが多いが、芸術教科として主体的に創造することが根本にあり、主体的に技術を工夫して使いこなすことでより表現を豊かにできる。

昨年度の近畿豊教育研究会での「卒業後の社会参加をめざし、アクティブラーニングの視点を取り入れた教科指導」を主題にした工芸科の研究授業と協議会を踏まえて今回の取組みを振り返る。

## 2 学習指導案（略案）

(1) 高等部 第3学年（普通科） 3名

(2) 単元名 工芸Ⅰ 染織「ろうけつ染めで小ふろしきを作ろう」

(3) 単元目標

- ・ろうけつ染めの技法や道具、材料の特徴を理解し、安全に制作することができる。（知識・技能）
- ・使う場面を想像して使いやすさ・美しさや楽しさを考え、構図や色彩のデザインを発想し、工夫することができる。（思考・判断・表現）
- ・より良い作品をめざして、意欲的にアイデアを出したり根気良く丁寧に制作したりできる。（主体的に学習に取り組む態度）

(4) 生徒観

男子2名、女子1名のグループである。学力に差があり、実技以外の授業ではグループ構成が異なるが、中学部から高等部へ全員一緒に進学してきた小規模な学年のため、まとまりがある。

絵画造形に関しては、3人とも制作・鑑賞とも関心が高い。イラストが得意な生徒から手先が器用でない生徒、生活年齢より幼い絵を描く生徒もいるが、小学部での少人数指導の成果により、10代でありがちな苦手意識や恥ずかしさで敬遠する態度は中学部のときから全く見られず、素直に集中して制作に取り組み、のびのびと個性を発揮して表現することができている。

今回の染織については初めての体験となる。

(5) 単元の評価規準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に取り組む態度
①素材の特徴や工程を理解する。 ②道具や材料を適切に扱い、安全に制作できる。	生活の中で使う場面をイメージし、素材の特徴や技法を生かした楽しいデザインや美しいデザインを構図や色彩で工夫することができる。	より良いものを作るためにデザイン・制作過程ともに粘り強く創意工夫や修正をすることができる。また、創造を楽しみ、制作や作品を通じて自他の良さを感じ取ることができる。

(6) 単元の指導計画

第1時	導入
第2時	アイデアスケッチ
第3～4時	図案製作
第5～6時	ろう描き
第7(本時)～9時	彩色
第10～12時	ろう抜き
第13時	相互鑑賞

(7) 本時の展開

①本時の目標

- ・道具や材料の使い方を理解し、安全に制作ができる。
- ・デザインしたイメージやバランスを考えて色を調整して着色することができる。

②本時の評価規準

- ・道具や材料の使い方を理解し、安全に制作ができているか。
- ・デザインしたイメージやバランスを考えて色を調整して着色ができてきているか。

(8) 本時の学習過程 (全12時間、本時は第7時)

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び支援の手だて等
10分 導入	<ul style="list-style-type: none"><li>・挨拶</li><li>・工程の説明を理解する。</li><li>・道具(ふで、伸子、染料、パレット、とろみ液など)の扱いや注意点を理解する。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・にじむ、にじまないの仕組みについて実物例をみせて確認する。</li><li>・過去に習った色彩の特徴を思い出せるように図を見せる。</li></ul>
30分 展開	<ul style="list-style-type: none"><li>・伸子に布を張る。</li><li>・霧吹きで湿らす</li><li>・染料を混色や水で調整し、とろみ液を加え、筆で塗っていく。</li><li>・引き立てたいところ、他を引き立てるために控えめな色にするところ、などを考えて色を作る。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・必要に応じて実演で技法を説明する。</li><li>・余分な液が垂れないよう、霧吹きや筆に含む量を指導する。</li><li>・デザインや能力に合わせて混色についてアドバイスする。</li></ul>
10分 片づけ	<ul style="list-style-type: none"><li>・片付け</li><li>・筆やパレットを洗い、机を拭く。</li><li>・次回への流れを把握する。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・制作を振り返り、混色や塗り方について反省点を聞く。</li></ul>

3 授業を終えて

この授業では、一番見せたい部分を引き立てるため、周りに使う色を抑えた色に調整して混色することをねらいとした。下絵を見ながら、どの部分を最も引き立てたいか、明度で分ける、彩度で分ける、色相でわかるなど、どのようなイメージでどのような色のグループを使い分けたいかを確認した。また、グラデーションを作る方法や過去にも指導した、引き立てるための抑えた色の作り方は黒やグレーを混ぜるだけでなく遠い色相の色を混ぜて渋い色をつける方法があることも再度確認しながら色づくりに取り組ませた。生徒たちは理解して色づくりを工夫できていたが、ろう描きが過ぎた部分をろうの上から何度も塗ろうとする生徒がおり、さまざまな理解度の生徒がいる

と実感した。

研究協議では、「机間指導の際に生徒の意図を聞いて、生徒が表現したいことやどのような作品にしたいかを丁寧に引き出していた。」「生徒それぞれが持っている力を発揮できている。」「主体的にやってみて、自分なりに自分色などを発見していると感じた。」という声をいただいた。

また、「長時間かけて作品を作るのは大変で集中力もいるもので授業時間の制約から普段自分は作業を急がしてしまいがちであるが、それぞれの授業は作品を作り上げる中での1時間であって、その積み重ねによって1つの作品が出来上がることを感慨深く思った。」などの感想もいただいた。

#### 4 現在の取組みと今後の課題

昨年度、今年度の工芸科の授業の課題は他に陶芸、金工（ロストワックス casting）、ガラスフュージング、他の専攻科、重複障がいのある生徒への授業では藍しぼり染め、金工（エッチングキーホルダー）、羊毛フェルト造形、張り子ランプシェード、木材ブロックを使った造形などである。今年度はコロナ禍で実施できなかったが、重複障がい以外の生徒には例年夏休みに自分で選んだ美術展を鑑賞して、感想レポートを書く課題を出している。

美術・工芸ともに「生徒の作品」として完成するために、生徒のアイデアやタッチを最大限に生かし、技術面で助けることはあっても生徒の意図や持ち味を生かすようにすることが大切である。アイデアに詰まった時には生徒の趣味や関心からモチーフを引き出したり幾何形体の組み合わせで造形する方法を勧めたりというアドバイスを試み、極力オリジナルのデザインで制作できるように、また、技術面で難しいことがあっても一緒に手を動かしながら好奇心を高めたり、経験を積んで自信を育てたりすることを心掛けている。自分で納得するまでデザインしたものは制作や完成させる意欲、そして達成感はさらに高まるものである。美術・工芸科の教員は4人いるが、「教えすぎないようにすること」、「導入の振り返りでは自他の作品を見て自己評価につながる言葉がけをすること」をそれぞれ意識している。

聴覚に障がいを持っている生徒にとって、視覚的に訴える表現の活動やその力を伸ばす造形教育の役割は大きく、それだけに美術工芸科の授業の責任は重いと考える。生涯にわたって造形表現や鑑賞を楽しんだり、関心を持って取り組んだり、自分の個性や表現を肯定的にとらえて磨き続けられるように、また他人のそれを理解し、大切にコミュニケーションにも生かせるように、美術・工芸の授業を工夫する必要がある。



# 「こころとからだを育てる実践～自ら学び、互いに学ぶ生活づくり～」を

## 研修テーマとして取り組んで

寄宿舎

### 1 はじめに

#### 研修テーマの設定理由

全校の研究テーマである「聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学びの取り組みと実践」を念頭に置きつつ、寄宿舎では、今年度の舎内研修テーマを「こころとからだを育てる実践～自ら学び、互いに学ぶ生活づくり～」と定めた。

寄宿舎では、入浴や排せつ、睡眠や同室の仲間とのかかわり、自治的な活動など、健康の保持や人とのかかわりでの課題が見えやすく、はじめての月経や精通、恋をする気持ちの芽生えなどを寄宿舎で生活する期間にむかえる舎生が多い。かねてから「こころとからだを育てる実践」への積極的なアプローチが課題となっていた。

寄宿舎指導員が、どのような視点を持ち、どのような取り組み方をすべきかを学びあうために、この研修テーマを設定した。

### 2 今年度の舎内研修計画

7月	22日	舎内学習会
9月	25日	グループ討議1
11月	2日	事例研究会
12月	18日	グループ討議2

### 3 舎内研修内容

#### (1) 舎内学習会

##### ア 研修の内容

テーマ：子どもたちの「こころとからだ」とどう向き合うか

講師：赤木瑞枝（本校学校長）

##### イ 研修のねらい

「こころとからだの教育の変遷」など、基本的な語句や考え方について職員間で共通認識し、その後の研修に生かす。

##### ウ 研修の工夫

事後だけではなく、事前アンケートにとりくみ、各職員の質問にも応える形とした。

##### エ 参加者の感想（アンケート結果から特徴的なものを抜粋）

- ・ 性教育の全体像というか、基本的なことがよくわかりました。
- ・ 自己選択、自己決定できる力が大切だと思いました。
- ・ 「一人で全部やろうと思わなくていい」とのことばに肩の力が抜けた。
- ・ 何気ない言葉やそれが当たり前と思っていることが傷つけてしまうことがあると知りました。

#### (2) 事例研究会

##### ア 研修の内容

(ア) 小中学部担当からの事例報告

(イ) 高等部担当からの事例報告

##### イ 研修のねらい

事例研究では、個人の事例を報告し、課題等の解決方法を共に考え、他の舎生の指導の中でも活かせるよう討議する。

#### ウ 研修の工夫

寄宿舎で学期ごとにまとめている「生活の様子」（舎生個人別）をベースにレポートを作成した。

#### エ 参加者の感想（アンケート結果から特徴的なものを抜粋）

- ・ 生活の中から子どもの姿をとらえてその内容を討議できてよかったです。改めて、情報共有の大切さを感じました。普段、話ができている性の部分をもっと話したかったです。
- ・ 助言者は誰かしら必要だと思った。いつもの引継ぎの延長のようになってしまう。

### (3) グループ討議①

#### ア 研修の内容

性の多様性と寝泊まりのある生活について考える。

「戸籍上は女性だが自認する性は男性という生徒の入舎にあたり、保護者から寄宿舎ではどのような配慮をしてもらえるかと質問があった」との想定のもと4から5人のグループに分かれ話し合いを行う。

#### イ 研修のねらい

アクティブラーニングの手法を取り入れ研修をすすめることで、自由な発想を出しやすくする。

#### ウ 研修の工夫

着任順の小グループとすることで忌憚のない意見を出しやすくする。出された意見は否定せずすべて模造紙に書き出す。話し合われた内容を要約して報告するほか、他のグループが討議した内容も見ることができるように意見の書かれた模造紙は掲示する。

#### エ 参加者の感想（アンケート結果から特徴的なものを抜粋）

- ・ 身近に問題となるテーマだったと思います。とても難しく悩むこともありますが、改めて生徒の気持ちに寄り添いを聴くことは大切なことだと思いました。こういった舎生が入る前も入った後もしっかりした知識と理解を深める必要があると思いました。
- ・ いろんな意見が出て、今後考えていかなければいけない内容だったので、学習が必要と改めて感じました。文字にすることで整理されるなぁと思いました。

### (4) グループ討議②

#### ア 研修の内容

恋愛と寝泊まりのある生活について考える。

#### イ 研修のねらい

ディベートの形式を取り入れ研修をすすめることで、普段の自分の考え方を離れて、物事を多面的に見ることや他者の考え方を取り入れて問題解決に向けた柔軟な考え方ができるようにする。

#### ウ 研修の工夫

一つのテーマについて、肯定派、否定派、ジャッジの3つの立場を経験してもらおう。

#### エ 参加者の感想（アンケート結果から特徴的なものを抜粋）

- ・ 新しい研修を取り入れることは必要と思うし、「賛成側」「反対側」の立場になり論議することは自分の考えをまとめて、伝えることとなるので、私にとっては貴重な経験でした。
- ・ 意図がイマイチつかめなかった。時間が短い。テーマがよくない。もっと意見の分かれるテーマにしてほしい。
- ・ 初めての取り組みでしたが、どの立場で主張するか、具体的な根拠をしっかりと考えていく視点は実践にも活かせるなと思いました。

## 4 舎内研修後の実践事例

小学部の高学年から高校生の時期を寄宿舎で過ごす舎生の中には、異性への関心が強く手紙やメールに関するトラブルが発生したり、初潮を迎える時に自分の体の変化を受け入れられずイライラしたりする様子がよくある。不安や動揺が起きやすい時期でもあり「こころとからだの実践」に取り組み

たいとは考えつつも、何らかのトラブルが発生したときに対処的に取り組んできた実態があった。  
今年度は、研修で学んだことを積極的に実践に取り入れてきた。次に研修後の取り組みを紹介する。

#### (1) 小中学部舎生担当の実践事例

今年度の小学部、中学部舎生は人数が4人と少ない。職員体制は舎生を集団でとらえることを意識して小・中学部合同の担当となり、少人数の集団ではあるものの異年齢集団での生活を充実させたい想いで日々の生活作りをめざしている。寄宿舎研修テーマを意識し、一人ひとりの思いに丁寧に関わったエピソードや小・中学部自治活動「ベストフレンズ」での活動とその後の生活の変化について記したい。

##### ア 事例1

今年度は新型コロナウイルス感染症対策により休校が続き寄宿舎が再開できたのは6月15日。舎生も職員も待ちに待った寄宿舎生活のスタートだった。

そんな中、今までと様子の違う舎生がいた。短髪だった髪は伸び放題、手入れが行き届かず頭皮の状態も良くない状態であった。しかし本人はどうしても髪は切りたくない様子。保護者、職員も頭を悩ませていたが、衛生面での改善をめざして「寄宿舎で散髪できないか？」と検討されるほどだった。保護者とも何度も話し合いを重ね、本人への説得も試みたが、髪を切ることはできなかった。

悩んでいる職員に対して学校長より「なぜ髪を切りたくないのか？本人の思いを引き出してほしい。職員の見立てでも良いので切りたくない思いはなぜなのか？考えてほしい」という助言をいただいた。

まだ語彙が少なく自分の思いをうまく表現することが難しい舎生の“こころ”をどう理解するのか？という課題に職員間で引き継ぎや担当者会議（パート会）の中で何度も話し合われた。

- ・コロナ禍での自粛期間中に家庭での生活はどうだったのか？
- ・日々の寄宿舎生活の様子
- ・職員からの髪型に対する声かけへの反応

などを担当職員間で話題にし、共通認識するようにした。

職員として早く髪を切る方向へ話を進めたかったが「舎生本人の思いを理解しよう」と根気強くかかわり、本人の思いを大切にすることでわかってきたことがあった。

職員の見立てではあったが「コロナ禍で休校が続き家庭で過ごすことが増えたことでおしゃれに関心の高い姉にあこがれているのではないか？」ということだった。どこかしぐさが姉の真似をしているように見え、鏡に映った自分の顔に笑顔を見せたり、髪を梳かすと喜ぶようになったりした。職員が髪を切ることにこだわらず、ロングヘアに憧れる気持ちを受け止め、一緒に楽しむことで本人の思いが膨らんでいったように感じた。

自分から職員に話しかけることが増え「髪伸ばす」「かつらちょうだい」など自分の欲しいものを伝えることばが増え始めた。友だちへ話しかけることも増え、自分の世界にこもりがちだった生活から友だちや職員を意識する様子に大きく変わっていった。職員の手話を真似て繰り返すやり取りが多かった会話から、自分の気持ちをことばで表しはじめるようになり表情も豊かになった。理解できることが増えたことと友だちや職員が自分の気持ちを受け止めてくれる存在だと感じた結果だろうと推察できる。

本人の思いを大切に、何度も職員間で話し合い気持ちを理解しようと試行錯誤する中で舎生の心の成長が感じられたできごとだった。

##### イ 事例2

小・中学部自治活動「ベストフレンズ」では、活動の柱を「あそぶ」「つくる」「みる」「知る」の4点を挙げ、舎生のやりたいことを実現できること、生活経験を広げることを大切に計画を立てて活動を行っている。今年度については「知る」の内容を職員から提案し、舎生に知ってほしいことを伝える場にしようと計画した。コロナ禍での寄宿舎生活で新しい生活様式にも思っていたより早く慣れた舎生たち。手洗い、うがい、検温なども生活の一部として自然にできるよ

うになったものの、入浴時の洗髪、洗体の仕方に課題があり、自分の体を大切にする性教育として「体を清潔にする」ということへの理解を深め、新型コロナウイルス感染症に対する予防を再認識する場として「知る」活動を行った。

(ア) ベストフレンズ

「どうしてお風呂に入らないといけないの?」「どうして『うがい』『手洗い』をするの?」  
スライドを用いて、わかりやすく、また意見交流ができるように話題提供を行った。

令和2年9月1日

## ベストフレンズ

どうしてお風呂に入らないといけないの?

どうして「うがい」「てあらい」をするの?

## どうしてお風呂に入らないといけないの?

## どうしてお風呂に入らないといけないの?

みけつ 不潔になることで、ますでてくるのがにおいの変化  
つまり・・・

## くさくなります

## どうしてお風呂に入らないといけないの?

つぎ 次、体 に汚れが付いたままだと・・・

## かゆくなります

## どうしてお風呂に入らないといけないの?

また、きちんと洗っていても  
シャンプーなどが頭皮に残って  
いたらフケの原因になります。

## ていねいに洗おう

## どうして「うがい」「てあらい」をするの?

いま 今はコロナウイルスという目に見えないほど小さな  
ウイルスが流行っています。  
ウイルスは手についているとそこから目やのどなど  
皮膚の薄い部分について、そこから  
体の中に入ってしまう。

## どうして「うがい」「てあらい」をするの?

いま 今はコロナウイルスという目に見えないほど小さな  
ウイルスが流行っています。  
ウイルスは手についているとそこから目やのどなど  
皮膚の薄い部分について、そこから  
体の中に入ってしまう。

## どうして「うがい」「てあらい」をするの?

けんこう 健康のためにきちんと  
「うがい」「てあらい」  
をしよう

舎生たちは真剣に職員からの話を聞いていた。

からだ臭になることについての話題では、職員からの「臭いのは好き?嫌い?」という問いに「お風呂好き。からだあらう。頭あらう」としぐさで話すAさん。からだ臭になることについては「体を搔いて傷になり病院へ行って薬をもらった」「入浴後にすすぎ残しに気づ

いた。ベタベタしていた。水道の水で流した」Bさんなど自分のことを振り返って考え発言する姿があった。コロナ予防の手洗いに関しては「予防のために手を洗うとお母さんから聞いた」と家庭での様子を話すCさん。家庭でのコロナ感染症予防の話をしっかりしていることも伺えた。友だちの話をする姿を見て自分の経験を語り相手との話題を共有できるようになったことに成長を感じた。

#### (イ) その後の生活の様子

ベストフレンズでの取り組み後の生活の様子を見てみると、体を丁寧に洗うようになっていたり、髪の毛を丁寧に洗い、リンスのすすぎ残しがないかと職員に確認したりする姿が見られるようになった。学んだことを生かし、意識して行動を変えるようになってきている。

今年度は人数が少ない分より深くお互いを知り、一緒に生活する中で確実に成長している姿が見られるようになった。舎生同士がお互いを認め合える関係ができたのも、職員が学びあいこころとからだを大切にしようと論議を続けてきたからだと思う。

#### (2) 高等部舎生担当の実践

今年度は研修のキーワードとなっている「生と性」に関わる取り組みを中心にすすめていくことになった。高等部の舎生は3名で、全員が卒業を控えた3年生である。これまで「生と性」については、特に場面設定を行って話をするのではなく、日常生活の中で個別にしていることが多かった。今年度も身体の成長や心の変化、男女の違いなど「性の絵本」(山本直英、高柳美知子、安達倭雅子：編者・大月書店)を使用して話をしたり、“好きな人”ができた時には肯定的に捉え、その上で自分の“好き”を押し付けないことや手紙の渡し方などマナーについても話したりしてきた。また、人を大切に思う気持ちにつなげるために、それぞれ舎生の話をしっかりきいて、共感することで自己肯定感を育むことを心がけてきた。

後半は高等部の自治活動「アミーゴ」でも、集団で行うことの意義もふまえて、高3生が卒業までに互いに安心して話ができる関係を築けるよう、3名で集まって話す場を設定していこうということになった。

##### ア 職員の体験談から自らの体験を語る場に (第1回)

寄宿舍は生活の場であるので、“ざっくばらんに話せる雰囲気を作ろう”と3階のなかよし会室(職員宿直室)で行った。二人の男性寄宿舍指導員から自身が思春期・青年期の話をした。初めての取り組みだったので、職員が舎生の年齢の頃はどのように過ごしていたか、女性への憧れや恋する気持ち、周りの人との関係をどうむすんでいくのかという視点を置いて語ることになった。そして、うまくいかなかった失敗談も盛り込みながら、わかりやすいようにスライドを準備しテレビ画面を映し出したり、紙芝居風のフリップを作ったりして楽しい雰囲気を作った。憧れのアイドルの話で同級生と話したなかでは、好みは人によって違うこと、その人の印象は個人によって受け取り方が違うことや「モテ期」の話、周りの友だちに彼女ができて自分だけさみしい思いをした話など舎生は興味津々だった。「俺やったら告白したな。先生は根性ないな」とか、「デートに行くならどこがいいか」など舎生と職員、舎生と舎生で話が盛り上がり、ドライブに行くためには運転免許が必要なことや、一人暮らしをするならお金を貯めないといけないこと、仕事を始めて最初のお給料は何に使うかなど、話の内容は卒業後の生活についてという内容まで発展していった。また、職員の体験談をきくことで、結婚するならコミュニケーションが大事という話がでたり、「最初の給料で自分なら好きな人にプレゼントしたいな」と気持ちを出したり、「他の人はどうか?」と質問も出したりと、楽しい会になった。卒業後の将来についても話題になり、普段の生活の中ではなかなかできなかった語りの場となった。

##### イ からだの変化としくみについて学ぶ (第2回)

この回では具体的に子どもから大人に成長していく時、「からだの変化」がおこること、そして、

その仕組みについて話題提供することになった。1 回目にリラックスできる雰囲気を作り出せたこともあり、今回も積極的に参加していた。夏の舎内学習会で講師の方から「性教育をすすめるにあたっては、保護者の同意も必要」とのアドバイスがあり、対象の舎生の保護者には事前に家庭での様子もききながら、当日話す内容を伝えて承諾を得ることができた。

まずは「性の絵本」(①生きるってどういうこと?) を使って、誕生から成長するとともにからだに変化していく様子を確認した。二次性徴の話を中心にしながら、A4 サイズの「からだの形イラスト(マグネット式)」を一人ひとりに準備し舎生に本人にみたくて、のどぼとけやペニスの位置を書き込ませた。また、「毛が生える場所はどこ?」と問いかけて、眉毛、髭、腋毛、すね毛、陰毛と書かれた枠から「毛」に見立てたクリップを外し、「からだの形イラスト」に貼らせた。足の“すね”がわからず、すね毛の場所のマッチングができなかったり、まだ髭が生えていない舎生はわからなかったが髭のある職員の顔を見て顎を指さしたりする様子が見られた。ここでは自分のからだを照らし合わせながら、舎生自身が子どもから大人のからだに成長していることを確認することができた。

次に勃起や射精について男性性器に見立てた模型を使用しながら血流が集まり勃起することや尿と同じところから精液が出ることを説明した。精通や夢精についても説明し、セルフプレジャー(自慰)や清潔、プライバシーについても伝えた。それぞれの舎生が自分なりの体験も話し、舎生同士が真剣に話を聴きあった。寄宿舎指導員からは「自分の体の変化にびっくりすることがある。痛かったり、自分だけみんなと違うのかなと思ったり…先生も経験してきた。」「卒業してもわからないことや困ったことがあれば、寄宿舎の先生や周りの方に相談すればいい。」と伝えた。困ったことがあれば、一人で悩むのではなく、友だちや職員、家族に相談、発信できる力につなげていきたいと考えている。

これらの取り組みではきっかけは職員からの投げかけだが、『～自ら学び、互いに学ぶ生活づくり～』に寄せていくようすすめ、その後は舎生自身からの質問や相談もみられるようになった。また、普段の生活の中では生活時間帯の違いもあり3人がそろって過ごすことは少ないが、何かあれば友だちのことを気遣う姿も見られるようになった。時には、思いがうまく表現できず、机をたたいて怒っている友だちの姿を見て、“小学生の頃は自分もそうだった”と振り返って、相手の気持ちを想像する場面もあった。ただ、これらの気持ちは舎生同士で直接伝えあうまでには至っていないところもあるので、まずは話せる雰囲気を作って、語り合う場を設定してきた。そして、今後は日常生活の中でお互いの意見や思いを伝えあえるようになり、卒業後の生活の中でも自分の思いを伝えたり、相手の気持ちを考えたりすることにもつなげていきたいと思っている。

## 5 結果

- (1) 今年度初回の研修を「舎内学習会」としたことで「こころとからだの教育」についての基本的な知識を寄宿舎指導員間で共有することができた。
- (2) グループ討議では、参加者一人ひとりの発言の機会を増やすことができた。
- (3) 研修後の取り組みでは、清潔など寄宿舎での生活とも密接にかかわる課題を子どもたちの中に投げかけることで、寄宿舎指導員からの伝達ではなく、自分たちで考える機会をつくり始めることができた。また、昨年度からの懸案であった高等部舎生への「こころとからだの実践」についても実施することができた。

## 6 課題

- (1) 交代制勤務の性格上、集合研修を実施しにくい面がある。特に今年度は夏期休業中に研修の時間を確保することが難しかった。少ない機会や限られた時間で有効な研修を行う工夫が必要。
- (2) コロナウイルス感染症予防や予算確保の問題で外部講師を招いての学習の機会を持つことが困難な状況の中、寄宿舎では寄宿舎指導員間で学びあいを中心となっている。各担当会議や寄宿舎の部会でも子どもたちの変化をとらえ日常的に職員間の意見交換を行っているため、舎内での研修に新鮮な学びの喜びが感じとりにくい。
- (3) グループ討議の方法として、新たにディベートを取り入れたが、ディベートの体験にとどまった感もあり、テーマに迫り切れなかった部分もあった。

- (4) 特に事例研究では、研修と日常業務の違いを感じにくい。事例（ケース）の解決方法を報告者と共に考える中で、類似の問題や状況における問題の解決に必要な分析力、判断力、洞察力、意思決定力等を身につけるため有効であると参加者には伝えているが、参加者アンケートからも「助言者を置いてほしい」との願いが強いことがうかがわれる。同じ職員の立場ではなく客観的なアドバイスに対する期待は大きい。

## 7 まとめ

これまでは必要性を感じつつ「こころとからだの実践」に踏み出すことができずにいた。今年度の舎内研修では、課題解決に向けて、主体的に考える機会、職員同士が対話的に学びあう機会をつくることができた。

また、「舎内研修後の実践事例」で紹介したように学びを実践に結び付けることもできた。職員それぞれが主体性を発揮し、職員同士が課題解決に向かう過程を経験することは、舎生の主体性や舎生同士の協働を大切にした実践と深くつながっていると感じている。

今後も実践を支える研修の企画を続けていきたい。

### 【参考文献】

「性の絵本 1」(部分タイトル:生きるってどういうこと?) 大月書店1992 山本直英、高柳美知子、安達倭雅子

## 「主体的・対話的で深い学び」に向けた国語科の取り組み

第 4 分科会

所属 大阪府立中央聴覚支援学校 発表者 中学部国語科

【概要】 平成 31 年度から中学部 1～3 年生の国語において、「てつがくカード」を使用して、平等な立場での話し合いをするように取り組んだ。その上で、グループ討議を通して意見を述べる、傾聴する態度を養った。今回、対話することで、より深い学びにつながることを、令和 2 年度は 2 年生での取り組みを通して発表する。

【キーワード】 主体的・対話的で深い学び 探求型学習 プレゼンテーション

### 1 はじめに

本校中学部の国語科では、平成 31 年度（令和元年度）中学 3 年生を中心に、「企画会議～合意を形成し、課題を解決する～」（現代の国語 3 三省堂）で、主体的で深い学びを考えていくことにした。導入に「てつがくおしゃべりカード」を活用することにした。このカードに関しては 1、2 年生にも実施し話し合いや意見交換の経験を重ねた。

本年度は、2 年生対象に、問題の解説、論説文の探求学習について、主体的で深い学びを実践していくことにした。

### 2 研究の概要と方法

平成 31 年度 3 年生に企画会議をする前に、「てつがくおしゃべりカード」を数回実施した。

「てつがくおしゃべりカード」は、オランダで広く親しまれている、円座で取り組むサークル対話である。円座というスタイルも聴覚支援学校にフィットすると思われる。ルールはシンプルで、間違っただけも正しい答えもない、また、発言者が終わるまで聞く、否定しない、強要しない（順番に当てたりしない）である。

「企画会議」では、「集団で何か決めるときに、いろいろな意見が出てまとまりにくいことがあります。よりよい結論を導き出すためには、相手の立場を考えながら意見を調整し、互いが納得し合える点を探り出すことが必要です、この過程を「対話」と呼びます。」（現代の国語 3 三省堂）と書かれている。

円座で実施する、サークル対話はダブルでフィットしており、効果的に活用できると考えられる。

「てつがくおしゃべりカード」では、相手の話を聞く態度や、多様な意見を聞くことへの関心が高められた。

「企画会議」のテーマは「定期テストはいるか？」に定め、活発に討議された。それぞれの視点で意見を話し合い、どのようにしていくかを建設的に話し合いができた。

更に今年度は、てつがくおしゃべりカードを導入していた 2 年生でも主体的な取り組みを実施した。意見を活発に言う学年ではあるが、てつがくカードのルール通り、否定したりせず聞いていた。いくつものテーマで話してみて、ある女子生徒が「みんな、いろいろな意見、ちがう意見、面白い」と感想を述べていた。多様性の理解を進めるきっかけになったかと思わせる発言である。

まず、2 年生には、相手にわかるように、問題を解説する試みを実施した。プレゼンテーション経験は社会に出た際に役立つ上、聴覚障がいを持つ生徒たちは苦手な分野である。

はじめは、モニターに向かって解説していた生徒も、回を重ねるたびに堂々としてきた。また、答えに対するアプローチを違う角度で解説できる生徒もでき、そのことを共有できたことは一定の成果である。



更に、説明的文章「人間はほかの星に住むことができるのか」（現代の国語2 三省堂）の表題にもなっている、問題提起を「自分たちで結論まで導く」、という取り組みを実施した。教科書を読んでもよし、理科の先生にアドバイスをこうてもよし、インターネットの情報を活用してもよし、何でもいいので、自分たちで調べ、発表し、知識を共有するという趣旨を伝えた。生徒たちは、すぐに作業に取りかかった。教員側はインターネット環境を整え、ひとり1台タブレットを渡したのみで、様子を見守った。生徒たちは、時には相談し、時には黙々と探求し続け、何と1週間で仕上げる事ができた。

3人ずつ発表していくうち、「質問に答えたいからもっと調べる」と言い出し、放課後残って調べる生徒、発表を聞いて、「もっとこの星について調べたい」や、「イラストを入れてもっとわかりやすい発表にしたい」と、自ら進んで残る生徒が続出した。発表に関しては、紙で示す者、パワーポイントやキーノートで発表する者、個性豊かで多様であった。

発表後の考察では、別の星の環境を憂慮し、地球で何かできないか？という話になり、とても有意義な話し合いになった。

### 3 成果と課題

指導要領の改訂、主体的な取り組みをしない限り評価をつけられないのではないかなど、この2年間の国語科は試行錯誤の連続であった。どのようにすれば生徒にとって「主体的な」取り組みができるのか、そのためにはどのようにしたらいいのか。それを解決する手立てのひとつが、てつがくカードであった。対等に話し合う、意見を聞く、その上で、探求型学習を取り入れ、情報を共有していく。

その活動は、生徒たちの好奇心を刺激し、もっと知りたい、もっと調べたい、質問したい、質問されたことに答えたい「～したい」に繋がった。そのことが主体的な取り組みへと誘ったことは間違いない。

また、それぞれの生徒たちが、様々な切り口で結論を出したことにより、多様性の理解にもつながったといえよう。多様性を理解することは、生きる力につながるので、一定の成果はあった。

また、プレゼンテーションをしたことにより、意見を聞く、言う、相手を尊重するという概念を芽生えさせた。丁寧にプレゼンテーションする生徒に、素直に称賛を送る生徒が多くみられた。

このように「主体的な深い学び」において成果はあったが、評価をどのようにするのかに関しては、課題を残している。

プレゼンテーションにおいては、ルーブリックで評価した。しかし、定期テストで、該当単元をどのように出題するか、かなり頭を悩ませた。テストでどう評価していくかは今後の課題である。

#### 【参考文献】

- ・ てつがくカード（イエナプラン）  
<http://naokonet.com/books-dvds>

